



テクノロジーと法の未来へ

vol.02

i T L 1期生としての大学生活1年目を振り返ると、二つの挑戦から自分の非力さを痛感する年であったように感じます。

市ヶ谷田町キャンパス初の大学祭の運営

一つ目は「i T L学祭実行委員会」での活動です。私は、副委員長として大学祭実現に向けた企画・運営・渉外を仲間とともに行ってきました。入学直後、4月の時点で組織編成や今後何をしていくのかなど、何も決まっていない状態からのスタートは、「わからないことがわからない」の連続でした。大学祭開催に向けて、いつ何をすべきなのかを見出して一つひとつ解決し、開催日から逆算して立て直しを行う。これを繰り返し、2019年11



授業で発言する筆者



ITL Fest.のポスター

月3日、市ヶ谷田町キャンパス初の大学祭である「i T L F e s t .」の開催に漕ぎつけることができました。しかし、成功と言うにはほど遠く、当日運営を行うメンバー34人の間で意思疎通もままならず、2020年度以降の反省点が多々残る結果となつてしまいました。物事を自分たちだけで作っていくうえで、どれだけ必要なことがわかっていなかったのか、価値観の異なる仲間とのコミュニケーションを図る際に生じる齟齬を解消して



友人とともに (左が筆者)

いくことの難しさを痛感させられました。次回は前回の反省点を生かしつつ、何より委員会全体で一つの目的に向かって全力を尽くせる場にしていきたいと思っています。

2社でのインターンシップ

二つ目はインターンシップです。私は1年次の夏季休業期間を利用して、2社でインターンシップを経験しました。

1社目は、『劇場版 Fate/Grand Order』や『はなかつぱ』など、主にアニメ映画・テレビアニメを制作するアニメ制作会社「株式会社シグナル・エムディ」です。インターンシップ募集時の「アニメ制作会社の仕事は、本当にアニメが好きでないと続けられない」という教授の言葉から、自分の「好き」を職業にした方々と直接やり取

挑戦 吉本未来

国際情報学部国際情報学科2年
中央大学附属横浜高校(神奈川県)出身

りをしたり、働く姿を自分の目で見たりすることで、自身の興味や職業選択の指針が得られるのではないかと思志望し、選抜を経てインターンシップへ臨みました。そこで私は、実際の人の動きを機械でスキャンして3Dアニメの動きを作るモーションキャプチャや、イラストレーターが制作した映像に対して声優がアテレコした音声に影響を加えて調整を行うダビング、アニメがすべての工程を終えて完成した際の初号試写など、普段であれば立ち入ることの許されないさまざまな現場を見学させていただきました。また、まだ情報が解禁されていないアニメ映画の設定制作に立ち会い、自分が主体となつてアニメ制作に関わる機会も与えていただき、非常に貴重な体験を得ることができました。私たちに感動を与

えてくれるアニメがテレビや映画館で放映されるまでには、たくさん人の手を経ていることを改めて感じることができました。

今回の経験のなかで最も印象深かったのは、「なぜこの職業を選んだのか」という私の質問に対する「仕事とプライベートの境目がわからなくなっただけ嫌になっただけもあつたけど、自分より若いクリエイター、プロデューサーの作品を見ていたら自然と体が動いている」という社員の方の答えです。私も将来、自分の「好き」を貫いていける職業に就きたいと思いました。そのためにも、まずは大学できちんと自分の興味について見つめなおし、探求していきたいです。

2 社目は、子ども向けの教材や図鑑、雑誌の刊行や、ワークショップを通じて学びの場を提供している「株式会社学研プラス」です。ここでは、小学生を対象としたプログラミングワークショップの運営に携わりました。子どもたちが教材を使っているなかでわからないことを教えたり、親と離れた場所ですら一人でワークショップに参加することで生じる不安感を少しでも緩和できるようにフォローをしたりするなかで、私自身がもともと初等教育に興

味があつたことを思い出しました。

「小学生」は、自分なりの論理的なプロセスから得た考えをもって判断し、同じ年の仲間とコミュニケーションをとっていくなかで、自分の居場所を確立していく、いわば「人間らしさ」を獲得していく期間だと思います。ITの学びを応用し、人間形成に寄与するシステムの構築など、子どもたちが「人間らしさ」を獲得していくための支援ができないか、そのようなテーマを

設定し、上級年次での研究を進めることも検討したいと思います。

今後の挑戦

2年次の後期からは、「国際情報演習」いわゆるゼミ活動が始まります。先輩のいない私たち1期生にとって、ゼミ活動は今まで以上に自主性を要します。またここでは、同じゼミの仲間と協働すること、ゼミの集大成である「卒業論文・卒業制作」の完成に向けて

は、自分が研究するテーマ、つまり自分の「好き」を見つけていることが求められ、自身の抱える課題とより根本的に立ち向かわなければならぬのだと覚悟しています。1年次の経験から得られた気づきや思い、反省を糧に、今後もしも続いていく挑戦の日々を楽しんでいきたいと思っています。